新井田小

主体的・対話的で深い学びのできる子の育成

～問題解決的な授業展開を通して～

（３年計画の３年次）

校長　成田　明彦

１　研究主題について

本校では、教育目標に「夢に向かい　考え　行動する子」、努力目標に「考えぬく　なかよく　がんばりぬく」、学校目標に「元気、やる気・根気、思いやりいっぱいの新井田っ子に～自分を高め、一体感のある学校に～」を掲げている。

昨年度まで、児童の思考に沿った学習問題「問い」を生み出す工夫、その問いを共有し課題解決の「見通し」をもたせる工夫について研修を進めてきた。問いを生み出す場面では、教材を工夫したり、発問・指示を工夫したりしたことで、思考のずれが生まれ、解決したいという学習意欲が高まり、主体的に課題解決に取り組む児童の姿が見られた。また、既習事項を効果的に活用したことで、問いの焦点化を図ることができた。見通しをもたせる場面では、様々な手立てを講じたことで、自力解決が難しい低位の子達が、安心して学習に取り組む姿が見られた。その一方で、見通し待ちをする子が出てきてしまったり、ヒントを与えすぎで教師主導の授業になってしまったりという課題があがった。

課題はあるものの、問題解決的な学習を進めてきたことで、主体的に学習に取り組む姿勢が身についてきている。そこで、今年度も研究主題及び副題を継続し、昨年度までの研究成果を生かしつつ、対話的な学習に取り組ませながら、問題解決的な学習の充実・改善を図っていくこととした。日常の授業実践の中で、目指す児童像の育成につなげていきたい。

２　研究主題のねらい

主体的・対話的に学ぶ子の育成のために、問題解決的な授業展開をどのように工夫していけばよいかを、国語科・算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

問題解決的な授業展開の中で「学習課題を生み出す工夫」や「児童の思いや考えを広げ深める場の工夫」等を行うことで、自分の考えをもち、主体的・対話的に学ぶ子を育成することができる。

４　研究内容

(1) 児童の思考に沿った学習課題「問い」を生み出す工夫

ア　児童の興味関心を高める教材を工夫する。

イ　発問・指示を工夫する。

ウ　既習事項を活用する。

(2) 児童の思いや考えを広げ深める場の工夫

ア　目的を明確にした交流の場を設ける。

イ　児童の思考過程を可視化（見える化）する。

ウ　発問・指示を工夫する。

エ　相手意識を育てる話し方を指導する。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者等	全体研修等
6	２３	初任者研修示範授業研修（２年） 国語「あったらいいなこんなもの」 授業者　教諭　横沢深雪	「質問・答え」を付箋に書いて分類し、対話を可視化することで、質問をして相手の考えを引き出すという能動的な聞き方を学習した。
6	２３	初任者研修示範授業研修（４年） 道徳「～命の大切さ～ 五百人からもらった命」 授業者　教諭　月舘久美子	「患者を救ったのは誰か」について自分の考えをもとに、子ども達による板書で、内容を分類した。板書をもとに、類似点・共通点・相違点に気付かせ、価値について深く考えさせた。
6	２３	初任者研修示範授業研修（６年） 算数「分数÷分数」 授業者　教諭　石村飛生	わり算の性質や面積図等を用いて、分数÷分数の計算について説明し合うことを通して、理解を深めさせた。
7	１３	授業研究（３年） 算数「あまりのあるわり算のしかた」 授業者　教諭　外崎直子	数図ブロックや図などの具体物の操作を通して、図と式が一致することを実感させ、あまりのとらえ方と計算の仕方を学習した。
9	２８	授業研究（１年） 国語「やくそく」 授業者　教諭　鮫ノ口絢香	ペープサートを活用し、表情の変化を視覚化することで、登場人物の気持ちや他者との関わりの理解を深めさせた。
１２	１４	授業研究（５年） 算数「割合」 授業者　教諭　昆春見	問題の文脈理解に対して関係図を、数量の大きさを表すために線分図を用いることで、割合の意味の理解につなげた。

(2) 一般研修

月	日	研修内容	講師
5	２５	生徒指導面における共通理解と不登校児童について 特別支援教育について（授業参観・講話）	本校教諭　　昆春見 本校教諭　　城井田暁子
6	1	特別に支援を必要とする児童生徒への支援	青森県総合学校教育センター 指導主事　　辻村義樹
8	２２	人間関係づくり（構成的グループエンカウンター）	青森県総合学校教育センター 指導主事　　千葉玲奈
１１	2	メディア機器の使用による健康被害と メディアコントロールについて	子どものネットリスク教育研究会 青森大学客員教授　　大谷良光 森田養護学校教諭　　菅原貴子
1	１１	メディア機器使用によるトラブルについて	青森県警察本部生活安全部 被害少年対策管　長利真至氏
2	8	学年研修報告会	各学年の授業者

６　研究の成果

(1) 「問いを生み出す工夫」では、「既習事項とのずれ」や「友だちの考えとのずれ」などのずれを授業の中で引き出したことで、解決したいという学習意欲が高まり、主体的に取り組む児童が増えた。

(2) 「児童の思いや考えを広げ深める場の工夫」では、児童の思考過程を可視化したり、目的を明確にした交流の場を設けたりしたことで、課題解決に向けて、協働的に取り組む児童が見られた。

７　研究の課題

(1) 課題解決への見通しが甘かったり、問いの共有が不十分だったりすることで、課題解決に至らない児童が見られた。特に、低位の子に対するアプローチの仕方に課題が残った。

(2) 交流の場では、様々な意見を出すことで考えの広がりを感じることはできていたが、考えの深まりにまでいたらないことが多かった。「自力解決の場」「交流の場」「共有の場」での達成状況を見取り、児童の実態や反応に合わせて、柔軟に授業を進めていく必要がある。

（記入者　　横沢　深雪）